
きさらぎ駅

棒人間@TK_JS10_e2 Ms

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きさらぎ駅

【Nコード】

N9230Z

【作者名】

棒人間@TK | JS10 | e2 Ms

【あらすじ】

電車にいつも通り乗る彼女。

だがいつもと違う電車に乗ってしまったのだった。

（前書き）

宿題用の作品です。

何かを参考にして書くってすごく書きづらい事がわかりました。

自由がないと言うか

@以下の意味不明の文字列は事情により追加です。

いつもの様に帰りの電車に乗り込む女性。

今日は金曜日で明日は休みである。

その女性は明日はどうしようかと考えながら夢の世界へ踏み込んだ。

電車は規則的に音を刻みながら走っていく。

がたんごとん。

変わらずに。

がたんごとん。

変わらずに。

彼女は微睡みの世界から帰って来た様だ。

電車に乗り込んでから2時間後の事だった。

流石に彼女は焦って立ち上がる。

窓の外は真っ暗で帰りの電車の途中にこんな真っ暗なところは通らないはず。

彼女以外の乗客は数名のみで皆泥の様に眠っていた。

訳の分からない電車、起きる気配の無い乗客。

電灯も無機質な光を放つのみになっていく。

車掌の居る運転室もブラインドが下げられ窓を叩くが応答はない。

焦りもだいぶ大きくなってきた頃電車はトンネルに入った。

トンネルを通る路線じゃないにもかかわらずに。

トンネルを抜け、暫くすると駅に到着した。

とにかくこの異質な車内から脱出したかった彼女は急いで外にでた。

駅の名は『きさらぎ駅』。

聞いた事もない。

彼女は逆方向に行く電車の時刻表を探したが、見つからない。

どうしたもんか…。

ケータイを開くが圏外で助けも呼べない。

さっきの電車も行ってしまった。

無人駅、電灯も朧げな光で頼りない。

さっきの車内を気味が悪いと飛び出たくせに今度はさっきの車内に戻りたいと思い始めた。

きさらぎ駅…。

さっきの電車はどこに行くのだろう。
確認してみた。

…。

…。

空白。

行き先不明。

きさらぎ駅の前後も駅名が書かれていない看板。
古くて消えたのではない。

本当に何も書かれていなかった。

彼女は呆然とした。

ならば私はどこにいます、と。

一晩ここで過ごし朝ここを出ようと考えたが、こんな訳のわからない無人駅にじっとしてられるほどの精神力を彼女は持ち合わせていない。

この状況で動くにしても同等の精神力が必要だが。

彼女は動く方を取った。

来た線路を逆走すると言う方を。

トンネルに入り歩き続けていたら、微かにだが太鼓や笛の音がした。
お祭りがどこか遠くでやっているのだろうか。
そこに行けば助けてもらえるかもしれない。
希望が少しだけ見えた。
そう思う彼女だった。

怖い怖い怖い。
幻聴じゃない。
少しづつ近づいてきている。

勿論彼女は歩き続けているのだから。祭囃子が近づいてくるのは当たり前だ。

だが違うのだ、彼女が言いたいのはそのじゃない。

前に進む彼女。

音は後ろから段々と近づいてきていた。

あの音は祭囃子なんかじゃなかったらなんなんだ？

背中には汗が流れ、体はがくがくと震える。

脚に力が入らなくなってきた彼女だったが、氣力を振り絞った。

更に進む彼女。

やはり近づいてくる音達。

どうしようも無くなり氣が狂いそうになる。

もう彼女の心は既に限界だった。

ついに膝をつき、地面に着いた手を見た。

もう私はここで終わるんだ、このまま倒れてしまおうか、と息も絶え絶えで前を見る。

もうすぐトンネルの出口のようだ。

更に人影のようなものが見えた。

彼女は最後の力を使い走り、その人に助けを求めた。
いきなり泣きつかれた彼はさぞびつくりしただろう。

こんな時間に真っ暗なトンネルの奥から走って来られたのだから。

彼は人の良さそうな顔で彼女の話を聞いた。
事情を知った彼は近くの街まで車で送ると約束してくれた。

彼女は安堵のあまり彼に話をし続けた。

彼も相槌を打ち話を聞き続けた。

暫くはなんの変わり無く話しが弾んでいた。

が、今はどうだ。

彼に話しかけてみても「ああ。」「や」「そう。」「としか帰ってこない。
それだけでは無く、明らかに最初とは雰囲気が違う。

電車内にいた時と同じ感覚が彼女を襲った。

「次のニュースです。 現在行方が分からなくなっている坂本ハスミさんですが、以前として行方がわかっていません。 では最後のニュースです。 …。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230z/>

きさらぎ駅

2011年12月28日22時54分発行